

## 小泉八雲「雪女」の特殊性

和田 理 紗 子

### 一 はじめに

「雪女」は一九〇四年に出版された小泉八雲の短編集『怪談』<sup>(1)</sup>に収録された再話作品である。『怪談』に収録されている再話作品は、日本語の原作が残っている場合が多い。しかし「雪女」は活字の形では残っておらず、八雲は『怪談』の序文で以下のように述べている。

「雪女」は、西多摩郡調布の或農夫が、その土地の伝説として、私に聞かせてくれたものである。日本の書物に出で居るか、どうか私は知らない、しかしそこに書いてある異常な信仰はたしかに日本の各地に、種々珍しい形式で存在してゐたものである。

八雲はこの時の農夫に聞いたとされる話を書き留めてお

らず、原話は残っていない。あらすじは以下のとおりである。武蔵の国のある村に、茂作と巳之吉という二人の木こりが、あるとても寒い晩に帰り道で大雪に遭い、小屋で一晩を過ごすこととなる。年寄りの茂作はじきに眠りにつくが若い青年であった巳之吉は目を覚ましたままで、恐ろしい風の音や戸にあたる雪の絶えない音を聞いていた。しかし巳之吉もとうとう寝入ってしまう。

しばらくして巳之吉は顔に雪がかかることで目を覚ます。いつのまにか小屋の戸は開いており、雪明りで部屋の中に白装束の女がいるのが見えた。その女は茂作の上にかがんで息を吹きかけた。そして巳之吉の方にも振り返り、女は巳之吉の上にかがんで、しまいには彼女の顔は殆ど巳之吉に触れるほど近くなった。女は巳之吉に、あなたはまだ若くて美少年だから害することはしないが、もし今夜のことを誰かに話したら殺しますと言って戸口から出て行った。巳之吉は自分の見間違いかと思ったが、茂作が死んでいるのを

見つけることになる。

翌年の冬の晩に、巳之吉は家に帰る途中、偶然同じ道を旅していた一人の若い女に追いついた。女はほっそりとした少女で大変綺麗であり、名を「お雪」といった。巳之吉はお雪をお嫁として家に迎えた。お雪はとてもいい嫁で、巳之吉の母も彼女を歓迎し、母の最期の言葉はお雪に対する愛情と称賛の言葉であった。その後、二人の間に男女一〇人の子供ができた。

ある晩、子供が寝た後でお雪が行灯の下で針仕事をしているのを見ると、巳之吉はあの雪の晩のことを思い出しお雪にその時のことを話してしまう。すると、お雪はその女は自分であると告げ、眠っている子供たちがいなければあなたを殺すところであった、子どもを大事にしてくださいという旨を告げて、そのまま姿を消してしまう。

日本に伝わる多くの異類婚姻譚は、有名な作品だと浦嶋子伝承や「鶴女房」などがあるが、いずれの作品も、異類である存在が最初に人間に約束させたことを破られたり人間が異類との間のタブーを犯したりすると人間に対して何らかの制裁が与えられる。しかし、「雪女」では、「今夜のことを誰かに話したら殺す」と、巳之吉が約束を破ってしまった場合どうなるかはつきり明言していたのにもかかわらず、雪女は巳之吉を当初の宣言通りに殺さずに姿を消してしま

う。この部分に、日本の他の異類婚姻譚と比べて特殊性を感じた。

雪女が巳之吉を殺さなかった理由としては、雪女がお雪として過ごすうちに巳之吉あるいは子どもたちに対して愛情を抱いたからだと考えるのが自然である。雪女は巳之吉らのもとから去る前に巳之吉に対して、子どもたちがいないければ巳之吉を殺していたこと、子どもたちが不平を言うことがあればそれ相応の扱いを巳之吉にすることを告げるので、どちらかといえば巳之吉よりも子どもたちに対しての愛情が強かったといえるかもしれない。さらに、あらかじめ「殺す」ということをはつきり言っておくことで、最後結局は巳之吉を殺さないことがより一層雪女の愛情の深さが際立って見えるのではないか。

本稿では、「雪女」を他の異類婚姻譚と比べた時に何らかの特殊性が認められるかどうか、また、それらが認められる場合、八雲がどのように「雪女」を執筆したことの意味が何であるのかについて検討する。第二節では、日本の異類婚姻譚の作品の典型はどのようなものであるかという点から見て「雪女」には特殊な点があるのかどうか検討する。第三節では、「雪女」に影響を与えたのではないかとされる八雲の異類婚姻譚の再話作品が、「雪女」と同様に当初の宣言通りに実行しないパターンをとるのかどうか検討する。第四節

では日本に伝わる他の異類婚姻譚と比較したときに第三節で検討した部分かどのようであるか検討する。第五節では、日本に伝わる他の雪女の伝承が八雲の「雪女」にどう影響を与えたのか検討する。

## 一 日本のおもな異類婚姻譚の典型

そもそも、日本の異類婚姻譚の典型的な話型はどのようなものであるのか、先行研究を確認する。

吉田幹夫氏の「異類婚姻譚の展開―異類との別れをめぐって―」<sup>2)</sup>では、日本の異類婚姻譚の話の典型的な話の展開について、元々異類婚姻譚というのは人間と異類である神の結婚によって生まれた神の子どもの誕生を語る始祖伝承が本来の原型であったと述べている。海神の娘であるトヨタマビメとホヨリ（ヒコホホデミ）の伝承を挙げ、『古事記』や『日本書紀』に記されているがその結末部分が異なっていることを指摘している。トヨタマビメは出産のときに本来の姿になって子を産むので決してのぞき見をしないようにとホヨリに約束させるが、ホヨリは出産場面を垣間見しトヨタマビメが大きくなりに変わって腹ばいになって身をくねらせていたのを目撃する。このことをトヨタマビメは非常に恥じてホヨリのことを恨めしく思い、本国へと帰

ってしまふというところまでは両者とも共通している。しかし、『日本書紀』ではその後の二人について触れることはない。

『日本書紀』のこの結末について吉田氏は、子の誕生を語るという本来の原型においてこれ以上の話の展開は不要であるので、『日本書紀』は元来の異類婚姻譚の原型をとっていると述べている。一方『古事記』は、『日本書紀』のように禁を破られて恥をかいた側は恨みの情を抱き態度を一変させるといふ異類婚姻譚の一般的な展開に従いつつも、その後「其伺ひし情を恨むれども、恋ふる心に忍へずして、其の御子を治療す縁に因りて、其の弟玉依毘売に附けて、歌を献りき。」と続くところから、トヨタマビメはホヨリのことを恨み本国に帰って行つたにもかかわらず結局は「恋心」が浮上し、再びホヨリと関わりを持つこととしたことがわかる。吉田氏によると、この結末部分は伝承本来の意図から離れて伝承中の人物の心を忖度しそれに共感するような方向に傾き出しており、正体が露頭すれば人類と異類は別れなければならないという異類婚姻譚の定めの中で、それでもなお別れがたいとする心の在り方が現れているとのことである。また吉田氏は、八世紀から九・十世紀にかけて、中国文学に刺激されながら浦嶋子伝承や「竹取物語」など、『古事記』のように登場人物に「恋心」を抱かせることによつて、

生じる離別せざるを得ない男女の未練や葛藤という心の動きが焦点化され、異類との別れを悲劇的な結末としてその別れを抒情的に描き出そうとする流れがあり、そうして別れの悲しみを余韻として響かせつつ終わるという日本の異類婚姻譚の文芸的特質が生じてきたと述べている。

元来、異類婚姻譚とは人間と異類の間に子どもができることで神の子どもが生まれることを語る始祖伝承であったが、『古事記』ではすでに異類と人間の悲劇的な恋愛を描く一つの文学表現の流れが生まれ、「雪女」もその特徴を持っている。異類婚姻譚の典型として、正体が露顕してしまえば異類と人間は一緒にはいられなくなり、その別れの悲しみを重点に置くというものがあるとわかったが、「雪女」もこれに当てはまるだろう。つまり、「雪女」は異類婚姻譚の典型的な話型に当てはまっているといえる。以下の節では、他の異類婚姻譚と比較し「雪女」にどのような特殊性が認められるかを探っていく。

## 二 八雲の「雪女」以前の再話作品との比較

比較対象は、「熱帯間奏曲」「鳥妻」「泉の乙女」「織姫の伝説」の四作品とする。これらの作品は、牧野陽子氏が、「ラフカディオ・ハーン「雪女」について」<sup>(3)</sup>で言及しており、八雲が「雪女」執筆以前に書いた同様のテーマの再話作品が

「雪女」に影響を与えたのではないかと指摘している。牧野氏は、いずれの作品にも共通する点として、この世ならぬ美女たちを妻として子どもを作り一定の期間は幸せな家庭生活を送ったのちに、妻を失うという筋を持っていると述べている。これらの物語は「妖精妻もの」と呼ばれており、これらを経て最終的には「雪女」へと行きつくのだとしている。のちに「雪女」に影響を与えたとされるこれらの作品から、なにか「雪女」の特殊性がみられないか検討していく。

### 二・一 再話作品

#### 二・一・一 熱帯間奏曲

まず、「熱帯間奏曲」<sup>(4)</sup>。この話は旅人が老獪に向かって話すという体である。男が熱帯で暑熱と疲労に力尽きて泉のそばで眠っていると、上にかがんでいる女がいる。その女は今まで見たことないほど美しく、不思議なことに二人は結ばれることになる。女は時々、泉の谷の向こうの幽虚なところへ一人で行ってはいけないといった。しかし男はこれを軽く笑った。男は毎夜、高くて長い響き音が聞こえるようになり、ついに耐えられなくなったある日の晩に女が眠っている間、さびた刀を携えて音のする暗い地方へと進んでいた。そのまま、男は女のもとへ帰る道を見つけることはできなくなった。そのうえ、周りは全く知らない土地で、話

し言葉も通じないほどであった。老獺にかるうじて通じる言葉は現代の言葉ではなかったのである。男は女への永遠の愛を誓い、そのまま力尽きてしまう。

女についての描写は、「これまでにこんなに綺麗な女を見たことがなかった」「あまりにも優美な、たをやかな姿勢に始めは恐怖を感じました」「この世の人間がかほまで美しいことはあり得ないと思った」とあり女がたいそう美しいことがわかる。しかし肌は黄金色と表現されており雪女の特徴とは異なる。また、女は「泉の谷の向こうの幽虚なところへ、一人でさまよわないように」と言っていたが、男はそれを破って一人で向かってしまう。結果男は女のもとへ帰れなくなってしまう。女は男に一人で行くなど言うものの、行ったらどうなるかということはない。

## 二・一・二 鳥妻

「鳥妻」<sup>(4)</sup>のあらすじは以下の通りである。あるとき、象牙取りの男が無数の犬を連れて狩りをしていった。そこで一群の海鳥が女へと姿を変えるのを目撃する。男は彼女たちを襲い、一人の女の手をつかんで捕まえた。残りの女たちは再び鳥へと姿を変えて飛び去った。捕まえた女はもだえることもなくただ泣いていたので、男は憐れに思っ手厚く保護するが、その憐みは次第に恋へと変わって女は男の妻となった。それから二年間ともに暮らしていたが、男が狩

りに行く間、女が再び鳥へ戻ってしまうことを恐れて女を小屋に閉じ込めていた。しかし、二人の間に子どもができてからはなぜかその不安もなくなつて、女は男とともに狩りに行くようになった。女は男に狩りをするうえで決して鳥は撃たないようにと約束させていた。ある日、二人で狩りをしていたとき、たくさんの鳥が撃ち落されているのを発見する。すると、女は子どもたちに急いで羽毛を持つてくるように言い、子どもたちが持つてきた羽毛で自らと子どもたちをつつんだ。女が子どもたちに飛びなさいというと、女も子どももたちどころに野鳥へと変化して空高く舞い上がっていった。男は泣き崩れ、鳥たちは永久に飛び去ってしまった。

異類婚姻譚ではめずらしく、異類の正体を知っているにもかかわらず結婚生活が続いている。実際は鳥であるが人間に姿を変えていた女は、作品の中で「若き月の如くしなやかに、またその如く白かりき。またその眼は野鳥のそれの如く黒くまたなごやかなりき」と表現されており、「雪女」同様、白く美しい女性として描かれていることがわかる。本文中に「女は男に説きて野鳥を撃つこと無からしめぬ。」とあるが、実際に撃った場合についてどうするか女は言っていない。さらに、鳥を撃ち殺したのは男ではないので約束を男が破ったとは言いがたいが、初めて男が女と会ったとき

に鳥を捕まえようとしていたので、男でなくとも人間が再び鳥に害をなすことが耐えられなかったとも推測することが出来る。そうして、女は子どもたちとともに鳥に姿を変えて飛び去ってしまう。「雪女」では、雪女は子どもたちを残して姿を消すが「鳥妻」では子どもたちも一緒に去っていくのでここも異なる点である。「雪女」は、巳之吉が子どもたちの世話を任せられるほど雪女に信頼を寄せられていたが、「鳥妻」ではそうでない可能性が高い。だが、どちらにせよこの部分から、雪女と「鳥妻」の女のどちらも夫より子どもに対してより深い愛情を抱いていたことがわかるのではないか。

## 二・一・三 泉の乙女

「泉の乙女」<sup>(4)</sup>のあらすじは以下の通りである。曾長のアキという男が、ある夜、底を流れている水地から湧き出ている泉の中から、月よりも白い夢のように美しい若者と少女が上がつてくるのを見た。二人は歌を歌い始め、アキは草葉の陰に身を潜めてその歌声を聞いていたが、やがて二人を捕まえようと、泉の内側に大きな網を深く沈めて二人が帰ってくるのを待った。二人が戻ると隠れていた草陰からいきなり現れて二人を襲い、二人はその果実を泉のふちに投げ散らして魚のようにその中に入ってしまった。そうして二人は網に捉えられたのであった。アキは網を陸にあげよ

うと力を籠め裏返したが、若者の方が網の口を飛び出て泉の底へと沈んで行ってしまい、結局アキが捕まえられたのは少女だけとなってしまった。やがてアキは女に恋心を抱くようになった。アキが年老いても女は美しいままであった。やがて二人の間に子供ができるものの、ある日女は「必ず戻る」といったのにもかかわらず、男に別れを告げてきらめく光のように泉の底へ消えてしまった。その後アキは女の帰りを待ち、百歳まで生き延びた。ある新月の夜に白い女が眠っているアキのそばに現れて、その白髪の手を自分の輝く胸の上に抱いて、歌いかけ、優しく接吻し、その年おいた顔をそつと撫でた。夜が明けると、アキは息を引き取っていた。

女は、「月よりも白く、魚の如く身露はなる、夢の如き美しき」「白き者ども」「人々はまたその美はしさに驚きぬ。」「白い女が月の光よりも白く湖の魚のようにしなやかな姿で」と女は表現され、「白い」という表現を多く伴っている。

この話は、女が男のもとを去るときに必ず戻ってくると約束をする。そうして男は長い間女を待っている。最終的に女は宣言通りに男のもとに帰ってくる。異類である女は当初の宣言通りに約束を守っている。

## 二・一・四 織姫の伝説

「織姫の伝説」<sup>(5)</sup>のあらすじは以下の通りである。主人

公 Tong-yong が、幼少のころに母を失い、十九歳になった時に父も失ってしまったので孤独の身になってしまふ。家も貧しかったので何の資産もなく、父の葬式を行うことも墓石を立てることもできず、彼は、お金を得るために奴隷として身売ることを決心した。彼がその若さと腕力をもつて働いても、立派な墓を建てる分のお金は得られないもの、それ以上は得られないことは分っていた。やがて彼は一人の州の高官に彼の立派で屈強な四肢を認められ買われていき、心願を遂げて葬式を挙げ立派な墓を建てる事ができた。

その後彼は奴隷として服役するために、買主によつて建てられた小さな小屋へと移り住み、そこに祖先の名が書かれた木牌を持つていつて、毎日祈りの香を焚いて家庭の礼拝の優しい勤行を営んだ。喪期が終わつても彼が父を哀慕する心は止まず、祖先への祭祀を欠くこともなかった。しかしそのうちに稲田の熱病にかかり、起き上がることができなくなる。彼は衰弱しきつて眠るかと思えば目を覚まし、また眠るのを繰り返していた時、見知らぬ美人が彼のそばにかがんで額にきれいな長い指が触れたことを夢に見た。彼女のひんやりとした接触とともに彼のあらゆる血管は新しい命が染み渡つたように沸き上がったので、彼は驚いて目を開いてみるとまさに夢に見た女が彼の上にかがんでおり額を愛撫していた。女は彼をじつと見つめて微笑み、「私はあ

なたのお元気を回復させ、あなたとの妻となるために参つたものです。お起きくださいませ。して一緒に礼拝をいたしましよ」といった。二人は祖先の位牌の前に行き、ともにひざまずいた。それは不思議な結婚と思われた。結婚後、小屋は魔法の力のように、お金を使うことなく裝飾が施されていたが、その秘訣は妻しか知らないものであった。また、妻は毎日調理された潤沢な食膳を用意し、一日中その地方では見られない方法で絹を織つていた。彼女が織る絹は、光沢のある黄金が緩やかに流れるよう機から流れ出るという不思議なものであった。それからしばらくたつたある朝に、彼が畑に出掛けようとすると女は珍しくそれをとどめ、彼に奴隷釈放の証書を渡した。彼女はひそかに不思議な絹の代金をもつて男の自由を買取つたのであった。このようにして彼は自由の身となつて、家も裕福になつていった。やがて二人の間に子供ができた。その男の子はすこぶるきれいな子どもで、生まれて三か月でものを言い、七か月目には聖賢の格言を暗誦し、十一月にならないうちに巧みに筆を使い老子の格言を立派に話すことができるほど優れた子どもであつた。それから十一月の夜、夫は将来立派になる子どものことや親としての計画など希望や喜びを盛んに談じ、一方妻は黙つて時折微笑みながら夫の話を聞いていた。しかし突然彼女は立ち上がり、もう男のもとから去つて行か

ねばならないこと、人間から生まれてきたのではなくしばらくの間化身となつて現れたこと、男の孝心の報酬として男のもとに使われた女神の織姫であることを打ち明け、愛情の誓いを夫に残し光り輝く中消えて行つてしまった。彼は彼女が永遠に去つてしまったことを悟つた。

女は作中で「見知らぬ美人」「美しい主婦」と描写されている。また、Tong が病で寝込んでいた時に突然彼のそばに現れることや、「彼女のひんやりとした接触」と表現されている部分に雪女と通ずる部分がある。作中で女が男に初めて会つたときに『私が支給いたします』と言つて、その通りに男に尽くす。「彼の美しい妻は、実によく『私が支給いたします』という契約を履行したのであった。」と本文中にもあることから女は宣言通り男に尽くし、そしてその役目を終えて男のもとを去っていく。

まとめると、いずれも「雪女」と同様に並外れた美しさをもつ女性が異類として登場する。また、これらの作品は今までに列挙した順に執筆されてきたが、「鳥妻」「泉の乙女」では女の表現に「白い」という特徴、「織姫の伝説」においては「ひんやりとした」という特徴が加えられ、八雲がこれらの作品の中で描く女性像は、次第に雪女に近づいていることがわかる。

## 二・二 再話作品との相違

そして、この四作品が「雪女」と大きく異なっている点有二つある。まず一つ目は「熱帯間奏曲」と「鳥妻」に共通していることであるが、女が「熱帯間奏曲」では「一人で行くにもかかわらず、それをもし犯した場合どうなるのかは言っていない点である。「雪女」では明確に「殺す」と言っているのが、「雪女」では事前に「殺す」と言っているにもかかわらず殺されない。ここがまず異なっている。

二つ目は「泉の乙女」と「織姫の伝説」に共通することで、「泉の乙女」では女は「必ず戻る」と言つて、最後本当に戻つてくる。「織姫の伝説」でも「私が支給いたします」という言葉通りに女は男に尽くし続ける。異類は、自分が言つたことを必ず実行しているのである。「雪女」では「今夜のことを誰かに話したら殺す」と言つたにもかかわらず、約束を破られても女は男を殺さなかつた。異類側がした宣言が前の二作品はポジティブな内容であり「雪女」はネガティブな内容であるので完全に同列で考えることはできないかもしれないが、この点も明らかに異なっている。

以上のことから、「雪女」では、「雪女」に影響を与えたと



される四作品と比べて、約束を破った場合どうなるのかはつきりと明言し、さらにその言葉通りに実行しないことがわかる。八雲は、この二つの点において「雪女」では今までの妖精妻ものの再話作品と真逆のことをしているのである。このことから、八雲は、雪女をより冷酷で恐ろしく、またその反面、より愛情深い女性としても描こうとしたのではないかと考える。雪女は巳之吉の目の前で茂作を殺し、そのうえで「殺す」と宣言しているので説得力が増し、ただ「今夜のことを話すな」というだけよりも恐怖を与える。その一方、「殺す」と言っていたにもかかわらず最終的には殺さないところから、自分の発言を曲げてでも男を殺すことができなほかに、男や子どもたちに愛情を抱いていたことがわかる。八雲は、この二点を今までの再話作品と変えることによつて、雪女をより冷酷で恐ろしく、一方で愛情をもった、より人間に近い存在として印象付けようとしたのではないか。

### 三 日本の他の異類婚姻譚との比較

第三節では、「雪女」以前に八雲が執筆した再話作品では、「雪女」と比較して、異類があらかじめ「してはいけない」と人間に強引に約束させるものの、もし約束を破ってしまったらどうなるのかということとはあらかじめ言っておらず、

また異類は当初の宣言通りに必ず実行するという部分が異なっていることがわかった。そこで、本節では日本の他の異類婚姻譚のうち、第二節で述べた異類婚姻譚の典型にあてはまっており、かつ異類が人間に「してはいけない」と宣言している作品の中で、約束を守らなかつた場合に起こることまで明言しているか、また異類が当初に宣言したことを曲げることがあるかを検討していく。

『結婚の原型―異類婚姻譚の起源―』<sup>(6)</sup>は、トヨタマビメの伝承と同じく「見るなのタブー」がある作品として、「蛇女房」「蛙女房」「蛤女房」「魚女房」「龍宮女房」「鶴女房」「狐女房」「天人女房」を挙げている。それらの作品の中から、異類と人間の間に「してはいけない」と事前に約束が交わされる「蛇女房」「魚女房」「鶴女房」を取り上げて、「雪女」と比較する。それぞれの伝承には様々なバリエーションが存在し、それらのすべてを確認することはできなかった。確認できた伝承の中から、「雪女」同様異類と人間の間にあらかじめ禁止事項が約束されているものを『日本昔話事典』<sup>(7)</sup>から取り上げる。

「蛇女房」では、ある若者が蛇を助け、やがて美しい女となつてやつてきて夫婦になる。女は妊娠し、覗くと言つて部屋に入つてお産をするが、ついで夫が覗くと大蛇が赤子を産んでいる。女は見られたことを悟り自分は助けられた蛇で

あると告げ、子どもを育てるための玉(片目)を置いて去る。その玉が有名になり殿様に取り上げられてしまう。夫が池へ行くと片目の蛇が現れてもう一方の目を与える。この話は、トヨタマビメの伝承と同じく産屋を覗くことが禁止されている話である。トヨタマビメの伝承では覗かれた恨みから男のもとから去っていくが、この話では妻は子どもを育てるために両目を取り出す。約束を破られ蛇だと正体がばれたにもかかわらず、妻は夫たちの前を去った後もたびたび干渉する。「雪女」では、雪女が夫たちの後を去った後の描写は存在せず、また他の異類婚姻譚でも人間のもとを去った後が描かれることはほとんどない。『古事記』のトヨタマビメ伝承ではその描写があるので、蛇も「恋心」が恨みの感情を上回って浮上した可能性が高い。しかし、覗くなどとは言うものの、覗いたらどうなるかということはない。

「鶴女房」は、助けられた鶴が女房となり、機織りをして恩返しをする話。若者が傷ついた鶴を助ける。美女が訪ねてきて女房になる。女は覗いてはならないといって機を織る。布が高価に売れる。男が機屋を覗くと鶴が羽を抜いて反物を織っている。女は正体を見られたことを知って飛び去る。女は、「覗いてはならない」というが覗いたらどうなるのかまでは言っていない。

「魚女房」では、昔、貧乏な男が寄木を拾いに浜に行くとき亀が卵からたくさん孵っているのを見つける。親亀が浜まで迎えに来ていたがそちらに行く様子がなかったので男はかわいそうに思っただ砂の中から亀の子を掘り起こして親亀に渡してやった。男はその後家に帰ろうとすると親亀がやってきてぜひお礼をしたいので私の背中に乗ってねいんやまで来てくださいというのでそれに従った。亀は男に、ねいんやの神様に何をしてほしいか尋ねてきたので男は神の一人娘を欲しいと答えた。男は神様の前に連れていかれて御馳走してもらい、一人娘をもらった。男は妻を連れて帰ると、家は一時金持ちになった。そのうち三人子どもができた。妻は毎日座敷の真ん中で障子を立てて水浴びをするのが習慣となっており、かねてから夫に私が水を浴びているときは決してのぞくなど約束してあった。ところが、ある日夫は障子に穴をあけて覗き見をし、大きな魚の姿になって水浴びをしている妻の姿を目撃してしまう。その後妻は夫に対してあなたあれほど見てはいけないといったものを見たのだからもう一緒には暮らせない、下の子は私が連れて行くので上二人の面倒はあなたが見てくださいと言って去っていった。さらに妻は夫にちーちー小箱というものを渡し、決して開けるなというが、男はその箱を開けて再び貧乏な暮らしに戻ってしまうという結末で終わる。「決してのぞくな」

と約束してあったにもかかわらず、男は妻の水浴びを覗いてしまう。また、妻が去って行った後も、開けるなど言われたらちーちー小箱を開けてしまう。男は二回も妻との約束を破るが、妻は二回とも約束を破ったらどうなるかということは言わない。男は二回とも約束を破り、不幸な目に合う。

以上、異類婚姻譚のお約束ともいえる「見るなのタブー」をテーマにした作品で、かつ事前に異類と人間の間に約束が交わされる三つの作品を検討してきたが、同じく『結婚の原型―異類婚姻の起源』で「見るなのタブー」の作品として紹介されていた「天人女房」では、三つの話の型がある。一番有名な離別型では、天女が沼で水浴びしているのを男が垣間見し、そのうちの一人の羽衣を隠して妻にするという話である。最終的に天女が羽衣のありかを知って飛び去る。ここまでは特に異類と約束をすることはないが、ここからさらに、男が天女の後を追って再会を求める天上訪問型がある。男が天上へ行くと、そこで天女の親に無理難題を出され、天女の援助で解決する。しかし、禁じられていた瓜を割って大洪水となり、男と天女は決別する。この話では、男は結局約束を破って望まない結末となる。この禁じられた瓜とは、女に禁じられていたものではないかもしれないが、男が禁止事項を犯してしまうという点は一致する。

さらに、異類婚姻譚の中でも異類と人間の間に約束が交

わされる作品として有名な、『浦島太郎』を取り上げる。ここでは『万葉集』『丹後国風土記』以来の浦島伝説を題材とした『御伽草子』に収録されている『浦島太郎』を取り上げる。ある日浦島太郎という若者が漁に出て亀を釣るが海へ帰してやる。次の日、浦島は海上に浮かぶ小舟の中の女房に頼まれるまま本国に送ってやった。するとそこは竜宮城で浦島はその女房と夫婦となって三年が経った。浦島は故郷に帰りたくなると、妻が自分は助けられた亀であることを打ち明け、決して開けるなどと言って美しい箱を渡す。浦島が故郷に帰るとすでに荒れ果てて七百年が経過していた。箱を開けると雲が立ち上って浦島は老人になり、そして鶴になって飛び上がった。この話でも、妻は約束を破ったらどうなるかというとは言わない。そして、男は約束を破って不幸な目に遭っている。

また、婚姻譚ではないが、異類と人間の恋愛話で、約束事が交わされる「見るなの座敷」という話が『日本昔話事典』にあるので、これも検討する。村の若い男が祭りの日に美しい娘を見初め、帰っていく女の後をつけると娘は立派な一軒家に入ってしまった。男は道に迷ったと言うと女は喜んで男を泊める。女は毎日男に御馳走を食べさせ、男も帰ることを忘れて一緒に暮らす。ある日女は用足しに出るからと男に留守番を頼み、奥に十二の屋敷があるが十一番目までは

よいが十二番目の座敷を決して見るなど言つて出て行つた。男が順に座敷を見ていくとそれぞれ、正月、初午、雛の節供などの楽しい光景が広がっており、男は最後の見るなど言われた座敷も開けてしまう。すると、そこには梅の木があつて鶯が飛んでいた。その後女が帰つてきて、怒り、鶯になつて飛び去っていく。この話でも約束を破つたらどうなるかということと言わない。

第三節では、八雲の「雪女」執筆以前の妖精妻ものの再話作品と比較し、約束を破つたらどうするのかははっきり述べていなかった点と、異類は当初の宣言通りに物事を実行する点という点が「雪女」とは異なる点と述べてきた。本節では、日本の他の異類婚姻譚と比べてときにその点はどうなっているかを検討したが、「雪女」と同じく異類と人間の間に約束が交わされる伝承では、約束を破つたらどうなるかという点とははっきりと伝えない。であるので、日本の他の異類婚姻譚では異類が当初の宣言通りに実行するのか否かという点において検討することはできなかった。だが、約束を破つてしまった人間が何かしら不幸な目に遭っていることは変わらなかった。

以上のことから、八雲の過去の再話作品と日本の他の異類婚姻譚を「雪女」と比べたとき、「雪女」は約束を破つたらどうなるかということをあらかじめ人間に伝えていた点

と、にもかかわらず実際に約束を破つてもその通りに実行しない点の二点を兼ね備えていることが特殊であるといえる。

#### 四 他の雪女伝承

八雲の「雪女」以外にも、日本には様々な雪女伝承が各地に伝わっている。

柳田國男の『遠野物語』<sup>⑧</sup>にも雪女の伝承について書かれている。全文は以下の通りである。

小正月の夜、又は小正月ならずとも冬の満月の夜は、雪女が出て遊ぶとも云う。童子をあまた引連れて来ると云へり。里の子どもは冬は近邊の丘へ行き、櫓遊びをして面白さのあまり夜になることあり。十五日の夜に限り、雪女が出るから早く帰れと戒めらるるは常のことなり。されど雪女を見たりと云ふものは少なし。

『遠野物語』は遠野地方に伝わる逸話や伝承などを記した説話集であるので、八雲の「雪女」のようなストーリー性はなく、雪女の設定も大きく異なる。しかし、子どもを引連れて遊んでいるという部分に、雪女の子どもへの愛情や結びつきが見て取れる。

八雲は「雪女」の序文でこの話は西多摩郡調布の農夫から聞いた話であると述べているが、この場所は『角川日本地名大辞典13』<sup>(9)</sup>によると、現在の東京都青梅市であることがわかる。多摩地域の歴史・民俗・地理・自然などをテーマに論考や情報が記載されている「多摩のあゆみ」<sup>(10)</sup>という季刊誌に、雪女に関する記述がある。第六十七号の「男井戸と女井戸」という話に雪女が登場する。あらすじは以下の通りである。村に、大変器量の良い働き者の娘がおり、村の男たちのあこがれの存在であったが、この娘は旅の男に恋をする。しかし、親の反対に遭い娘は苦心して井戸に飛び込んでしまう。それをきいた旅の男は驚き駆け付けて助けようとするが、慌ててもう一つの井戸に飛び込んでしまった。そして二人は死んでしまう。このことがあつてから村の人は男井戸、女井戸と呼ぶようになる。やがて冬が来て、男井戸と女井戸のあたりにも雪が降り積もり、この雪が降る静かな夜には井戸のそばのカヤの木の下に雪女が出るといううわさが広まった。雪女は子どもを抱いていて、道行く人にその子を抱かせるとすつと消えてしまうという。

八雲がこの話を農夫から聞いた可能性も十分にあると考えられる。女井戸に飛び込んだ娘が雪女と同一人物だとは言い切れないが、娘が優れた女性として描かれている点は八雲の「雪女」と共通している。また、この話の雪女は子ども

を抱いており、子どもと結びついた存在として描かれている点も「雪女」と共通する。

『日本昔話事典』には、雪女について、多くの場合は雪の降る晩や吹雪の時に現れ、地方によって正体や名称がさまざまであると記述がある。岩手県や宮城県では雪女に出会うと精を抜かれてしまうといわれ、茨城県では行き会った旅人に雪女が声をかけ、旅人が返事をできずに後姿を見せると谷底へ突き落してしまうという。新潟県では人を凍死させたり、子どもをさらって、生き胆を取ったりすると伝えられている。青森県津軽地方では赤ん坊を抱いてくれと言つて現れ、それに応じると赤ん坊はたちまち天にまで届くほど大きくなるという。しかし断ればその人は死ぬ。

「雪女」の伝承は地方によってさまざま異なるものの、子どもと関わりがあるものが多く、また人間側が雪女によって理不尽な目に遭っていることもしばしばある。八雲は、全国各地に伝わる雪女の伝承で、雪女が子どもに対して深い愛情を持っていることや人間にとつて理不尽な存在であることを「雪女」に反映させているのではないかと考えられる。その上で、八雲が雪女の伝承を聞いたとされる多摩地方に伝わる「男井戸と女井戸」の伝承の、男と結ばれない悲しみのあまり自害する娘や子どもを抱いた雪女を中心に、「雪女」を執筆したのではないだろうか。これらの伝承と、第三節で

言及した「雪女」以前の妖精妻ものと組み合わせできた作品だと推測することも可能である。いずれにしても、全国に伝わる雪女伝承に少なからず影響され、雪女を子どもたちに対する愛情の深い存在として描こうとしたのは間違いないだろう。

また、「雪女」には八雲の原体験が影響していることを指摘する先行研究もある。八雲が七歳の時に両親は離婚し、それ以降母に会えることはなかった。田部隆次氏は『小泉八雲全集別冊』<sup>(11)</sup>で八雲の母に対する思慕の念が終生絶えなかったことは弟のジュームズにあてた手紙から明らかであると述べ内容を記している。

私は思った、「ここに母の魂が生きて居る。又私と同じ欲、同じ心、同じ本能を持った私の知らない人が居る」私にはいつも魂が二つあるように思はれる。一つは謀反の心、制御にたへず、支配を憎み、なんでも規制整頓を嫌ひ、前後の考なくして愛憎の念強き事、これ一つ。

今一つは忍耐自重の心である。(中略)小さいながらに成功を私に与へた美術に対する感受性……はこれ皆母の賜物である。……私共は母の子である。少くとも高尚な人(融通、打算の才能でなく、愛する心を愛する力こそ高尚である)をつくるに足る資格を有したのは我々であ

つた。私は一かどの富よりも、母の一枚の肖像を欲しく思ふ。

他にも、父については別の手紙に「父を見た事は五度しかない」や「私は肉体的精神的に父に似たところはない」と言っていることを挙げて、八雲は少なくとも肉体的には父方に属していることから、これらの言葉も母親に同情を寄せるあまりにこう考えたのだと指摘している。

以上のように八雲は父に比べて母に対し深い愛情を抱いていたことから、幼少のころに会えなくなってしまう母に対する思いを「雪女」という作品に投影させた可能性も推測できる。実際、日本各地に伝わる雪女の伝承には雪女と子どもが深く関わっているものが多い。『怪談』を執筆する際に雪女伝承を取り上げたり、雪女を子どもに対して愛情深い存在として描いたりしたところに、八雲の原体験が影響していると考えられることできるだろう。

## 五 おわりに

異類婚姻譚とは、人間と異類の間に子どもができることで神の子どもが生まれることを語る始祖伝承であった。しかし、次第に異類と人間の悲劇的な恋愛を描く一つの文学表現の流れが生まれ、異類の正体が露顕してしまえば人間

とはもう一緒にいられなくなり、その別れの悲しみを重点に置く。パターンの作品が生まれていった。「雪女」は、それらの作品の誕生を象徴する物語であるといえるだろう。

「雪女」以前の八雲の再話作品では、異類は約束を破ったかどうかは伝えず、また自身が宣言した約束を破ることはない。一方で雪女は、約束を破ったかどうかを伝えるのが、いざ人間が約束を破った際、宣言通りの罰を実行することができない。ここに、「雪女」の異類婚姻譚における特殊性があるといえる。雪女は、禁忌に対する罰をおこなう存在としてでなく、人間に愛情を抱き信念を曲げてしまう異類として描かれている。この物語は、異類婚姻譚における異類がより人間に近い存在になっていく様を象徴するものであるといえる。また、日本に伝わる多くの異類婚姻譚と比較しても、「雪女」が特殊な点は変わらない。

この点を兼ね備えた作品にすることによって、八雲は雪女をより冷酷で恐ろしく、しかし、人間に対し深い愛情を持った人間らしい存在として描こうとした。その愛情は、夫に対する愛情も含まれているが、主に子どもたちに対する愛情だった。それは、各地に伝承された「雪女」の雪女が、子どもに対して愛情深い人物として描かれていたからではないだろうか。それに加えて、そこには、八雲の母に対する思慕の情が投影されていた可能性もある。

#### 注

(1) 『怪談』の初版本は *Kwaidan: stories and studies of strange things* Boston: New York: Houghton, Mifflin and Co., 1904 である。

(2) 平成元年七月『成城大學經濟研究』所収

(3) 平成二十一年十二月『日本文学協会』所収

(4) 初出は、明治十七年『異文学遺門』*Stray Leaves from Strange Literature* である。

(5) 初出は、明治二十年『支那怪談』*Some Chinese Ghosts* である。

(6) 平成十三年十一月に北宋社より刊行

(7) 昭和五十二年に弘文堂より刊行

(8) 初版は明治四十三年六月で、柳田による自費出版。

(9) 昭和五十三年十月に角川書店より刊行

(10) 第六十七号 平成四年五月十五日発行 たましん地域文化財団(ADEAC デジタルアーカイブ <https://rc-adeac.tre.co.jp/> 平成三十年一月九日最終アクセス)

(11) 昭和五年十二月第一書房より刊行

#### 参考文献

稲田浩二・大島健彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編『日本昔話事典』(昭和五十二年十二月 弘文堂)

関敬吾『関敬吾著作集2 昔話の歴史』(昭和五十七年二月 同朋舎)

高橋康雄『結婚の原型―異類婚譚の起源』(平成十三年十一月 北宋社)

宋社)

たましん地域文化財団「多摩のあゆみ」第六十七号(平成四年五月)

福原麟次郎注釈『KWADAN (怪談)』(昭和四十七年十一月 研究社)

社)

牧野陽子「ラフカディオ・ハーン「雪女」について」(平成元年七月

『成城大学経済研究』)

柳田國男『定本柳田國男集第四卷』(昭和三十年四月 筑摩書房)

吉田幹夫「異類婚姻譚の展開―異類との別れをめぐって―」(平成

二十一年十二月『日本文学協会』所収)

#### 付記

小泉作品からの引用は『小泉八雲全集』(昭和三年一月〜昭和五年十二月、第一書房)による。『古事記』『日本書紀』は新編日本古典文学全集、『御伽草子』は日本古典文学全集による。その他、文献の引用に際し適宜ルビ等を略し旧字を新字に改めた。

(わだ・りさこ) 平成三十年度本学卒業生)